

序にかえて

13年ぶりの沖縄

部長教授 杉原弘人

1974年9月、13年ぶりに沖縄県に学会で出張した。1951年夏、探検部の海外遠征の第1号として、横田教授を隊長に、近藤、藤田、河本、米川の諸君と沖縄、八重山郡島調査隊を結成し、米国占領下の沖縄に行きつゝ、実に13年ぶりである。沖縄の空は青く、海はコバルト色にかがやき、私たちを魅惑した。戦跡には慰霊塔が二つ、三つあるにすぎず、私たちは沖縄南部の最後の戦場となった摩文仁の丘で、日本軍将兵の冥福をいつまでも祈った。石垣島、与那国島、波照間島、西表島での1カ月余の調査は探検部17年の歴史に輝かしい業績を残した。

13年目の沖縄は以前と同じく、明るさと、青い空が私を迎えてくれた。しかし、那覇市内は昭和50年開催の海洋博の準備で、道路の改修、ホテルの建設と大阪での万国博と同じ状況で、13年目の夢を追うにはあまりにも難然としていた。数百合之塔、健児之塔、など以前の通りであったが、戦跡がすっかり観光地に変わっているのに驚いた。昭和42年3月、愛媛大学学術探検部によって発見されたという2,350mの玉泉洞は日本内地の鍾乳洞とは相違した規模であり、私も昭和36年春、岡山県新見市の洞窟調査に探検部の諸君と行ったことがあるので、非常に興味をもって、高さ5m余の石筈、列穴サンゴ、花崗を見た。探検部の沖縄遠征は昭和36年～38年に引きつづき3回行われた。私たちの沖縄県での学術調査は部員の熱熱な探検部精神により立派な業績があげられたが、私たちがこの業績を残すことに御返

力下さった沖縄県在住の関西大学の先輩諸兄のことを忘れてはならない。探検部が沖縄県に遠征する時にはかならずお世話になった鉢嶺清博氏を私は学会の暇をみつけて訪問した。鉢嶺氏のお宅は国際通りより少し入った久茂地三丁目にあり、静かなところにあった。鉢嶺氏は8年程前より健康をそこなわれ、病床生活を送っているとのことであった。沖縄派遣の探検部全員で沖縄本島最北端の辺戸岬より当時の日本の最西端の与論島を感慨深く望んだこと、茅打パンダの絶壁の景観に驚いたことなど、13年前の話をし、探検部へのご協力、ご援助を深く感謝し、一日も早くご回復されることを探検部一同がお祈りしていることをお伝えして帰った。

鉢嶺氏はその後、病状、悪化し、私が訪問した翌年なくなられた。探検部一同と共に鉢嶺氏のご冥福をお祈りしたい。

1967年に探検部創設10周年の会を行っているので、1977年の今年は20周年になる。いよいよ探検部も成人式を迎えることになるので、OB、現役一体となって“事故のない探検部”の栄光を維持するために努力しよう。

(社会学部教授)

